まきあげよ、　もでもの
又とよむ、　せだかこが、
ゑかなつが、　たてゝ

## 御歸城の御時附路次上下ハ知念佐敷おもろ

十の二〇

(三八)　あけしのがふし

一かみがなし、　かみきよら、　あおる
こかせ、　やもとる、　くもいきやか、
こがねしま、　むちへ　おゑちへ
又のろがなし、　のろきよら

## 雨乞の時おもろ

七の四六

(三九)

一やどり、　こしらいや、
めもかゑの、　まさうぜ、
こゑが、　おゑち、
又もりの、　こしらいや
又みるやとゞるきや
又かなやとゞるきや
又あぢはやも、　なりきよら、　おるち
又去よはやも、　なよも、　さゝげて

## 昔神代よ百浦添御普請御祝ひの時

十三の一〇

(四〇)　おくらつがふし

一去よりおゑる、　てだこが、

十三の一一

十三の一五

もゝうらおそい、げらいて、
たまぞしり、たまやりぞ、みもん
又ぐもくおわる、てだこが

**(四一)** ゑよりゑこのふし
一ゑよりもりぐもく、
ながゑ、きよら、おぐもく、
だりじよ、また、かみ下、とよめ
又まだまもりぐもく、

**(四二)** 同ふし
一ゑよりおわる、てだこが、
むちやの、さいく、あどゑて、
むねうちする、こむいぶさ、もだちへ
又ぐもくおわる、てだこが

---

十三の一

六の二六

## 唐船すらおろし又御茶飯之時

**(四三)** あかずめづらしやがふし
一あかぞめづらしや、
いぢらがぞ、おみまぶても、はりやせ
きみの、めづらしや

## 祝ひの時

**(四四)** きこへきみがなしみちやるまさりがふし
一きこゑ、きみがなし、
ねいし、まいしの、
あらぎやめ、ちよわれ
又とよむ、きみがなし

尙穆王樣御冠船之時より此おもろに成ル（原本ニハコノ註四四ノトコロニアレド此處ニアルベキカ）

十一の八〇
廿一の一〇五

## （四五）あおりやへがふし

一おぎもかなしきや、
てだ、かみ、そろて
まふよゑれ
又みかうかなしきや

## （四六）

一こいしのが、さしふ、そのぞらよ、
志までん、くにでん、みおやせ
又志らげ、おゑて、きよらげ、おゑてから
志までん、くにでん、みおやせ

# 御冠船之御時おもろ

---

十二の一二

尙穆樣御冠船之御時よりおぎもかなしきと云おもろに成ル文句上座ニ有ル

## （四七）志より志このふし

一志よりおゑるてだこが
おもいぐわの
あそびなよれぞのみもん

首里天尙益王加那し乃美世にみおゝ事をおかみおもろ御双紙二部書あらため申壹部は御城に御格護壹部ハ言葉間書に調おもろ主取乃かゝへかくこおよせめされ候

旹大清康熙四十九年（庚寅）
七月三日

摂政　越來王子朝奇

三司官　識名親方盛命
幸地親方良象

奉行　池城親方安倚
　　　津嘉山按司朝睦
主取　座間味親雲上景典
　　　津覇親雲上實昌
　　　立津親雲上全明
筆者　伊良皆筑登之親雲上重休
　　　並里筑登之親雲上嗣喜
　　　瑞慶田筑登之親雲上正方
　　　小渡筑登之元敷
　　　嘉數子宗宣
おもろ主取
　宜野灣間切大山村
　　安仁屋親雲上

# 校正を終へて

校正がやつと濟んだ。私は校正中に氣付いた點をざつと述べ、序でにオモロの文法と音韻とを手短に書く必要を感じてゐる。

例言の中にも、「オモロの記載方は、出來得るだけ、原本に從つたが、中には多少訂正したところもある。」といつて置いたが、三校か四校の時、ふと氣が付いて、その配列方を變更したのも一二ある。十二の巻いろ〳〵のあすびおもろおさうしの七十八章に、

一」ちやむかねや（ア・ちや）
むこゑけりやの
ちやむこはひや
よはひやよ
ヌだにもこともて
げにもこともて
ヌたまもたちや事
みしゆもたちやこと

又たまもちにげて
みしゆもちにげて
又さゝくさもこの
よりてさもころ

といふのがあつて、第一スタンザの意味がさつぱりわからなかつたが、いろ〳〵考へた結果、

一ちやむかねやむこ
ゑげりやのちやむこ
はひやよはひやよ

とならべかへたら、判然わかるやうになつた。ちやむかねは人名で、ちやむこはその對語である。ゑげりやはいちゑき又はいじゑけりの同義語で、賢いとか利口とかいふ程の意味をもつてゐるが、現代琉球語では變化してイギリ又はイジリになつてゐる。はひやよはひやよは、ハイヨー〳〵に當る古語で、これはしまつたといふ感歎辭である。さうすると、このスタンザの意味は、喜屋武加根は氣のきいた奴だと思つたら、これはしまつた！といふことになる。もうこれだけわかつたら、後の方は樂に讀める。逐語譯をして見ると、正直な婿と思つて、信實な婿と思つて、玉を持たしてやつたら、着物を持たしてやつたら、玉を持逃げして、着物を持逃げして、この毒草みたいな、浮草みたいな、婿の野郎奴が、といふことになる。さゝくさはサゝを入れる時（即ち干潮に海岸の水溜にミンナといふ草を流して魚を捕る時）に用ひる毒草のことで、之を婿の前に附けると、やくざな婿といふ事になる。よりくさは浮草といふことで、之を婿の前に附けると、ヒンジムン（放浪して歩く無頼漢の義）といふことになる。この言葉は今日でも沖繩島の北部の山原地方の方言に遺つてゐる。最後の句のさゝくさむころのろは、琉球語ではnとrとは能く混同するから、ことによると、のの誤りかも知れないが、萬葉の子ろ、妹ろ、夫ろのろと比較することも出來る。一般的に人を指すのでは無くて、特定の人を指してゐる點は、兩方とも能く似てゐるが、これには萬葉のろのやうになつかしみがなくて、却つてその反對の意味が含まれてゐるやうな氣がする。けれどもこれは私が少し考へ過ぎてゐるのかも知れぬ。それから萬葉に於けるやうに、むこをもこと書いて、oとuとが混同してゐるのも、注意すべき點ではないか。

　兎に角、おもろの原本にあゝいふ竝べ方をしたところから考へて見ると、當時のオモロの校訂者たちには、この盜難を歌つたオモロの意味が、はつきりわかつてゐなかつたやうな氣もする。このオモロのすぐ前に、三スタンザからなる可なり長いオモロがある。アイヌのシノッチヤのやうに、「やにやはれ、ゑ、おい、ちよろめへ、ゑい、やうら、やうら、やうら、やうらへ」、といふ掛聲のやうな、はやしのやうな、言葉の連續したオモロであつて、一つのスタンザがぶつつゞ

けに書かれてゐるが、「おもろさうし」では、意味のわからないオモロは大方かういふやうな形式で書かれてゐる。このオモロの第一スタンザも亦この例に漏れない。

私は此頃オモロの言葉間書（コトバエーデヤガキ）（卽ち註）や、オモロの校訂者たちによつて編纂された『混效驗集』の語釋に、かなり誤りのあるのを發見して、オモロを解釋する場合に、文獻のみをあてにしてゐては間に合はないといふことを痛切に感じてゐる。オモロが五百年間の詩歌である以上、その用語に幾多の變遷があつたことは疑ふ餘地がない。一例を擧げて見ると、尙眞王時代（西暦一四七七年——同一五二七年）のオモロ詩人を謳歌したオモロ（八の一）に、

おもろ、ねやがりぎや
あまへわちへ、からは

（オモロ子ヤガリが歡び給ひし以上は）といふのがあつて、このあまへわちへには、歡び給ひての義があり、又同時代に首里城の正門歡會門を造つた時の讚歌（五の六九）に、

おぎやかもいがおこのみ
ちはなれは、そろへて
あまへのぢやうはげらへて

（尙眞王の御意により、屬島の民を招集して、歡會門を造營して。）といふのがあつて、このあまへのぢやうには、歡びの門の義があるが、兎に角このあまへるといふ動詞には、欣喜雀躍といふほどの意味があつて、尙眞王時代の琉球民族の若々しい氣分が能くあらはれてゐるやうに思はれる。それから一世紀經つて、島津氏の琉球入後、卽ちオモロの第二第三の結集が完結した頃に、この言葉の内容がどう變化したかは判然しないが、淸の康熙五十年頃、卽ちオモロの註や『混效驗集』が出來た頃には、その内容は大ぶ變つてゐたやうである。それは『混效驗集』に、あまへれ。すばいれを解して、「二つ共歡の心か」としたのでも能くわかる。そして同書に、あまゑおぢやうを歡會門としたのを見ると、この頃までは、あまゑおぢやうの發音はまだ崩れなかつたのである。けれどもその意義が殆ど忘れられてゐたことは、あの解釋に疑門が附してあるのでも知れる。その後その發音は、いつの間にか變化して、廢藩置縣當時には、ハーメーウヂヤウになつてゐた。ハーメーウヂヤウはやがて「老婆の門」の義で、偶然とはいへ、それが琉球民族のたそがれを象徴するに適當な言葉であるのも不思議ではないか。あまへるの内容は、かうして全然變つて了つたが、その形式だけは崩れずに遺つてゐて、別の内容を盛つてゐる。卽ち現代琉球語のアメーユンは、國語のあまゆに稍ゝ近い意味をもつてゐて、その同義語（シノニム）のスィベーユンも、國語のそばゆに稍ゝ近い意味をもつてゐる。

思ふに、オモロは大方當時の生きた言葉で歌はれてゐたのであらう。が稍ゝ後になると、特に

オモロが衰へて來ると、オモロの詩人たちが、日本現代の詩人が古語を復活させて詩を作つてゐるやうに、所謂みせゝるの言葉を復活させて、オモロを作つたこともあつたであらう。かうして各人が古語を復活させる場合には、同一の言葉を使つても、その內容に多少の差異があることを知らなければならぬ。これはオモロの研究者が常に念頭に置かなければならないことである。

それからオモロは、音韻の變化や語尾の變化のために、一寸見ては國語と緣故が遠いものゝやうに見えるが、注意して見ると、その語彙の十中八九までは、國語と同語根である。たゞ同じ言葉でも意義に多少の差異はあるとしても、音韻の法則と語法とさへ心得てゐたら、國語の知識の豐富な人に取つては、オモロの研究などはさう艱難でもないやうな氣がする。

チヤムバレン氏は、其の琉球語に關する論文 Essay in Aid of a Grammar and Dictionary of the Luchuan Language の中に、國語と琉球語との系圖的關係について、

> この二國語の語法を精較すると、語詞論に於ても、措辭論に於ても、その委曲末節に於ける著しき差異と共に、根本的一致――イスパニヤ語とイタリヤ語との間に於ける完全な一致――の存在することがわかる。これは單語の場合に於ても亦等しく言ふことが出來よう。もし兩國語共通の祖語があつたとすれば、日本語は正しく其の或部分を、琉球語は其の他の部分を、忠實に保存してゐるのであらう。――しかも近代日本語が古代日本語を代表するよりも、琉球語がそれを代表することが一入忠實であることがわかる。それは動詞の語尾變化に於て著しく現はれてゐる。要するに、二國語の相互的關係を、イスパニヤ語とイタリヤ語とのそれと、否寧ろイスパニヤ語とイタリヤ語とのそれと、比較するのも大過はなからう。

といつてゐる。琉球の政治家羽地王子向象賢も、二百四十年前、その「仕置」の中に、「竊惟者此國人生初は日本より爲渡儀疑無御座候然者末世之今に天地山川五形五倫鳥獸草木の名に至迄皆通達せり雖然言葉の餘相違者遠國之上久敷通融爲絕故也五穀も人同時日本より爲渡物なれば」と書いてゐる。琉球最後の政治家宜灣親方朝保も亦明治の初年「琉語解釋」を著し、その序文中に、向象賢の說に贊同して、「まことにさることなるべし古事記傳萬葉集などを見るに日本上古の言葉爰には今も多く殘れり」と記してゐる。實に氏がいへる如く、日本本土ではとうに死語となつたものが、今現に南島で使用されてゐるのが多いのは不思議な位である。試みにその中から著しいのを舉げて見ると、ウハナリ・クワナリ（後妻・前妻）、アケヅ（蜻蛉）、アカトンキ（曉）、シチヤダン（細螺）、マヽキ（細射弓箭、末々岐由美）、ツビ（尻又は肛門）、ナイ（地震）、シヽ（肉）、イリキ（和名抄に加之良乃安加俗云伊呂古）、ナヘグ（蹇）、ヨム（算む）、マル（屎麻理散）、ナス（產す）、ケカル（別る）、アマリ又はアモリ（天降）、フグリ（陰囊）、コトイ（特牛）、サユン（貲布）、ツクラ

(鯆)、カブチ(枳椇、和名抄に加布智)、ウゴナアリ(祝詞式、集侍神主祝部等)、マグ(交接)、ハエ(榮)、イガ(我)、ワ(吾)、ア(吾)、ケニ(源氏、給へるけにこそは)、シブタユン又はシブタイカータイ(源氏、しほたるゝあま)、ワラベトハラタチミショーチー(源氏、わらわへと腹立ち給へるか)、等の如きものである。これらの中には、オモロや金石文や方言にのみ遺つて、標準語では最早使はれなくなつたのもある。かういふやうに南島には古代日本語が澤山遺つてゐるばかりでなく、こゝでは日本古代の生活様式が窺はれるのである。柳田國男先生は、その劃時代的の名著『海南小記』中の「阿遲麻佐の島」の章で、天孫民族が沖繩諸島を經過して北進したことをほのめかされ、移川子之藏氏も印度・南支那・南洋・南島・日本の白鳥説話の比較研究から、同様なことをほのめかされたから、オモロの所謂ニライ・カナイといふ樂土も遠からず闡明されようとしてゐるが、もうかうなると、チャムバレン氏などの天孫民族南下説は、到底維持することが出來なくなつて來るのである。けれども私は言語學上の見地から、かうして北進した天孫民族が、九州で朝鮮半島を經過してやつて來た比較的文化の程度の高い民族と落合つて、こゝで融合して一種の新文化を形成し、さうして出來た混成民族の一部が、逆に南島に移住して、かつて袂を分つた連中と邂逅したこともあり得ると考へて居るが、これは私の固定觀念が私を不聰明にしてゐる爲ではないかと、心ひそかに悲しんでゐる次第である。兎に角南島語の大部分は、彼等が天孫降臨の途中で置去りにされた時に、或は移住した時に、もつていつたものだらうが、その後死語となつたものが、平安朝から室町時代にかけて日本々土との交通が頻繁になつた時に、補充されたのもあつたであらう。又中央部ではとうに死語となつて、九州地方の方言の中に生きてゐたのが、輸入されたのもあつたであらう。又今の詩人がよくやるやうに、オモロの詩人たちもハイカラがつて、日本の文語又は方言をオモロ中に取入れたこともあつたであらう。これはオモロを通讀した人のとうに氣が付いたところである。だからオモロ中の難語で、國語辭典の助けを借りて容易く解ける場合がかなりあることを知らなければならぬ。それから琉球語には日本語で影を隱した祖語の一部が保存されてゐるわけだから、かういふものに出會はしては、國語の辭書はもう役に立たない。かういふものは琉球語自身で解くより外仕方がない。即ち各地方及び各島嶼に遺つてゐる方言が生きた辭書でなければならぬ。試みに二三の例を擧げて見よう。昨年の夏『校訂おもろさうし』の原稿を携へて上京した時、柳田先生に、琉球國由來記の中に、「このまきよの雨欲しやにこのくだの水欲しやに」といふ文句があるが、そのまきよとくだは何の意味かと聞かれて、即答することが出來ないで赤面したが、國に歸ると間も無く、縣下の校長會か何かで那覇に出て居られた國頭郡今歸仁校の校長の宮城眞治君に、國頭郡の方言にマキヨといふのがあるかと聞いたら、羽地村にマチユーといふ言葉があつて、境内若しくは氏神の守る範圍といふ程の意味をもつてゐ

るといふことを教へて下さつた。お蔭で由來記に出てゐる祝詞の意味が能くわかつたと同時に、オモロに出てゐる「まきよ〳〵ののろ〳〵」(三の一二)、「づれのふた、づれの、まきよ、下れ欲しや、いしけ、まきよ、いしけふた、おれぶしや」(十三の七三)、「まきよのかず」(二十の三六)、「まきよ、ゑらです、おれたれ」(二十一の一)の意味まではつきりして來た。それからオモロにつゞみ(鼓)の同義語になりよふといふ言葉があつて、そのふが清音だか濁音だかゞ永い間疑問であつたが、田島利三郎先生が採集された「各間切のろくもいのおもり」中の國頭郡金武村のオモリに、なりぶといふ言葉があるのを見て、なりよぶの正しい發音を知ることが出來た。それから琉球語にサダルといふ言葉があるが、これには先になるといふ意味があつて、沖縄本島はもとより、宮古八重山諸島でも、奄美大島諸島でも、つまり南島全體で、この言葉は盛んに使用されてゐる。そして琉球の標準語では、それがサダラ(將然形)、サダイ(連用形)、サダユン(終止形)、サダユル(連體形)、サダリ(已然形)、サダリ又はサダレー(命令形)といふ風に活用してゐる。私はこの動詞の語根のサダと猿田大神又は猿田彦神のサダとの音韻の類似及びこの神をして古史神話中に有名ならしめた特徴――古事記に所謂「仕奉御前」、書記に所謂「吾先啓行」――から、猿田彦といふ神名それ自身に、「御先導をなしたる神」の義のあることを論じて、一昨々年五月の國學院雜誌で發表したことがある。思ふに西暦七世紀の頃記紀が書かれた頃には、日本人は最早さだるに先立ち行くといふ意味のあることを忘れて了ひ、いつしか猿田といふ漢字をあてはめて、たうとう新しい傳說まで造出したのであらう。それは兎に角、天孫降臨當時の大和言葉が、今なほ南島の方言中に遺つて、生きてゐるのは面白いことである。このサダルのお蔭で、オモロの一の卷の五の尙巴志の進軍を歌つたオモロ中にある「物知りはさだけて」(巫覡を嚮導として)の意味を說明することが出來、更に進んで國史中の疑義まで闡明することが出來たのは嬉しいことである。それから十の卷の二の開闢のオモロに、「てだこ、うらきれて」といふ句があつて、日神が待遠しがりての意味をもつてゐるが、この外十四の卷の一四にも、「うらきらしや、おがて、かゞ、おらに」といふのがあり、十三の卷の一四三にも「大きみが、きみし、うらきれて」といふのがあるが、このうらきれてには、みぼしやこといふ註がつけてある。これは見たがるといふことである。そしてこれは琉球の三十字詩には、「みぼしやうらきらしや」と熟語的になつて出てゐる。この言葉は琉球の標準語では、もう使はれなくなつてゐるが、國頭郡の方言及び奄美大島の方言では、まだ生きて活いてゐる。このうらきれるを國語でも語原の解けない難語の中に數へてゐる人もあるが、これは裏と切るの二語の結合したもので、吾々の語感には少しも外國語らしく響かない言葉である。そして國語辭典中にもこれと類似の言葉が見出せるやうな氣がしてならない。試みに手近にある言海を引いて見ると、國語では、顏をオモテ(表)といふに對して、心をウラ(裏)といふ

場合がある。そしてこれからウラ淋シ、ウラ恥シ、ウラ悲シ、ウラモトナシ、羨（ウラヤ）む（心病ム）等が出來た。琉球語のうらきれるも恐らくかうして出來たのであらう。これにもと心切れるの義のあつたことは最早疑ふ餘地がない。さてかういふやうにして、語原の穿鑿に耽るのはおもしろいことであるが、それに拘泥すると、言語の意味を掴みそこなふ恐れがあるから、この點について、私はなるべく臆病であるのが安全だと思つてゐる。前にもいつた通り、言語は絶えず變化する性質をもつてゐるから、語原がわかつたからといつて、必ずしもその語義が突止められるのではない。十一の巻の二九の君南風（きみはゑ）の讃歌中に、「人の、いぢへて、おに、おどちへ」といふ句があるが、之を逐語譯して、人の出でゝ、鬼をおどすとしては、その意味が全くわからなくなつて了ふ。出ぢへては琉球語の慣用句（イヂオム）で、でありながらとかくせにとか譯すべき言葉である。さうすると、この一句の意味は「人間のくせに鬼神をも威壓してマア！」といふことになる。十七の巻の一三に、「きこゑ、いけぐすく、みらんすが、ほるび」といふ文句があるが、これも亦文字通り譯しては、意味が取れない。琉球語では、損することを亡（フル）ビュンといふから、これは名高い池城を見ない人は損だといふことになる。これでオモロを解釋するにあたつて、現代琉球語の言語情調を無視してはならないといふことがわかる。中には當時の特別の言ひあらはし方であつたらうと思はれるので、現代語に類例のないのもある。柳田先生はかつて「もゝとふみあがり」には、百度も地べたを踏んで跳上るといふ意味があつて、處女が始めて男子にあつた時の歡喜を形容する言ひあらはし方だから、玉依媛（たまよりひめ）が幾人もゐたやうに、「もゝとふみあがり」も幾人もゐたらう、といはれたことがある。私の研究は之を證明して上げるまでに進んでゐないが、「もゝとふみあがり」の解釋についての先生の卓見には敬服せざるを得ない。十四の巻の三三に、「さしきよ、ふみあがて、ちよわれ」といふのがあり、二十巻の二〇にも、「もゝと、あがり、ふみ、あがて、ちよわれ」といふのがある。これらは「もゝとふみあがり」を歌つたオモロ以外のものにあらはれてゐるのであるが、やはり極度に歡喜せよといふ程の意味をもつてゐるのであらう。これには前にのべたあまへるがあらはす歡喜よりよりも、ヨリ強度の歡喜——手の舞ひ足の踏むところを知らないほどの歡喜——の意味があつたに相違ない。この外オモロには輕い歡喜をあらはすに、ほこりといふ言葉が使つてある。「混效驗集」を繙いて、形容詞や副詞が今日のより非常に豐富なのを見ると、おもろ人（びと）即ち古琉球人の感情生活は現代人のよりも、ヨリ纖細であつたことがわかる。以上は校正中に氣付いたことであるが、これからオモロの語法について述べることにしよう。

まづ動詞の語尾變化（コンジュゲーション）のことから始めよう。國語の原形動詞は、四段活用に近いものであつたとの說が有力であるが、琉球語の活用はすべて四段活用のやうに活いてゐる。試みに ichun（行く）と

いふ動詞の活用を擧げて見ると、 ika（將然形）、ichi（連用形）、ichun（終止形）、ichuru（連體形）、iki（已然形）、iki又は ike（命令形）といふ風になつてゐる。オモロでは、これがいか（將然形）、いき（連用形）、いく（終止形）、いく（連體形）、いけ（已然形又は命令形）となつて、國語のそれに近くなつてゐる。それから琉球語の係結は國語のそれに著しく類似してゐる。ya, ga, nu の如き主格をあらはす弖爾波を受けて、終止法で結ぶのと du（ど）といふ弖爾波を受けて、連體法で結ぶのとがある。この du（ど）は國語のぞに相當するもので、國語では文語にのみあつて、口語では見られ無くなつてゐるが、琉球語では今なほ規則正しく用ひられてゐる。オモロには、この外に、國語のこそにに相當するす（轉じてしよ、じよ、しゆ、じゆ、ぢよ、となつてゐる）といふ弖爾波があるが、これで受ける時には、やはり已然形で結ぶことになつてゐる。どの例をあげると、

けふふきよるかせや（今日吹く風は）
どくかせどふきよる（毒風ぞ吹く）

のやうなものである。中には、（十三の一七四）

こぶとりる（飛ぶ鳥ぞ）
はやぶさる（隼ぞ）
かにある（斯くある）

のやうに、どがるになつた例もある。二百年前に出來た「花賣の緣」といふ脚本には、

「朝夕波風の音ど聞きゆる
「中々にぎやかな所だやべる（d'aya-biru.）

といつたやうな形で出てゐる。中には連體形で結ぶ代りに、さらめといふ助辭で止めたのもある。すの例を擧げて見ると、

志よりもりぐすく（首里森城は）
ながえきよらおぐすく（永久に美しき城なるかな）
たりじよ上下とよめ（實にこそ上下擧りて謳はめ）
せの君しよ世はにせめ（我が王こそ國家を知ろし召さめ）

のやうなものである。又

きみがなしきみの（尊き君なる）
あぢすしりよわめ（王こそ知ろしめさば）
かみしもおそて（上下を襲ひて）
かなわしよわれ（大平を樂ましめ給へ）

といふ風なのもあるが、これは下にバの意があつて、直說法ではないが、それでも結びといふこ

とが出來よう。二百年前に出來た「執心鐘入」といふ脚本に、

約束の御行合やだにすまたしちやれ、
袖の振合せど御緣さらめ

といふのがあるが、四五十種もある琉球の脚本中で、この語法を使つたのはこれ一つである。琉球で始めて戯曲を作つた玉城朝薰がオモロの研究者であつたこともこれで能くわかる。この詞には、世の常の逢引きはなるほどやつて見たけれども、かう行きずりにあつて陷つた戀こそは、何かの因緣であらう、といふ程の意味があるから、これも亦前のオモロと同じ形式のものである。序でにこのだにすについて述べて置く必要がある。これはオモロに澤山ある語で、だに、げにといつも對句になつて出で來るが、オモロの姉妹詩のくわいにや、やらしにも見出だされるのである。オモロには、「これど眞の眞王やれ」とあり、くわいにやには、「だに給れ、實に給れ」と出てゐる。そして脚本にも、「御眞人のまぎれ誠よ聞きとめれ」(爾民衆よ、能く聞け)といふ使ひ方がしてある。オモロには、だにすといふ形はあるが、げにすといふ形は一つも見出せない。此島御國又は本國といふ意味の言葉に、だしま、だくに、だきよりと使つてあるが、このだも亦だにのだと同一のものであるやうに思はれる。三十字詩に、「名護の番所だんじよとよまれる云々」といふ文句がある。このだんじよもだにすの遺物であらう。この掛結がオモロにのみあつて、尙眞王時代から琉球入時代までに建てられた琉球文の金石文にないのを見ると、これが散文で使はれてゐたのは、餘程古い時代であつたに相違ない。兎に角この語法はすたれて了つたが、だにすがだんじよとなり、これにかがくつついて、danjuka といふ副詞句となつて、今日の口語の中に生きてゐるのはおもしろい。吾々は今でもダンジユカアンヤル(なるほどさうだ――これはしたりといふ程の言語情調をもつてゐる。)といふ言葉を能く使つてゐるのである。かういふやうに、この語法は韻文を作る時にのみ用ひられたので、後にはその本來の意義が漸次忘れられて、新しい意味まで生じて來るやうになつた。

「とひやくさす、ちよわれ（千年もながらへかし卽ち萬歲の義）(八の三六)
「とも〻すへ（千年も）
おぎやかもいす、ちよわれ(五の三一)
「おぎやかもいしよ、
すゑまさてちよわれ(五の六九)
「おもいぐわす（御子こそは）
とひやくさよ、ちよわれ(五の四五)
「とも〻すへ、ぎやめも、（千年迄も）

おぎやかもいしよ、（尙眞王こそは）
すゑまさて、ちよわれ（子々孫々繁昌し給へかし）（五の六九）

の如きは、希望若しくは命令をあらはすものである。これがずつと後になつて出て來た形でなくて、尙眞王時代からあつたことは、右のオモロを見てもわかる。この形式は多分、

ともゝすゑ
とひやくさすちよわめ（五の五二）

のやうなものからかはつて來たのであらう。語法については、もつと述べたいことがあるが、これ位のところで切上げて、音韻論に移ることとしよう。

琉球語の音韻組織も亦國語のそれと大同小異である。現代琉球語には、a・i・uの基本母韻があつて、e oの二韻がない、兎に角五十音圖中で、エ列とオ列とは、影をひそめて、エ列はイ列に、オ列はウ列に、隱れてゐるやうな有樣だ。（但、e oの短母韻が全く無くなつてゐるのでは無い。その次に鼻音が單獨でやつて來る時には、時偶現れて來ることがある。例へばten, den, ton, don, wen, menの如き場合である）。チャムバレン氏は日本語と姉妹的の關係にある琉球語に、a i uの短母韻だけあつて、e oの短母韻が缺けてゐるところから、古代日本語もさうであつたと速斷されたが、よし日本古代語の母韻には、a i uしかなかつたとしても、現代琉球語のそれをもつて、之を證明するのは、早過ぎるやうな氣がする。南島語に於て、o eから來たところのu iと在來のu iとの前に子音がくつついて音節を作る場合の現象やオモロ又は金石文等の假名遣の有樣などを調べたら、思半ばに過ぐるものがあらう。琉球の標準語では、ケ、ゲは、ki, gi, キ、ギは chi, ji, 子は ni, ニは nyi, レは、ri, リは yi となり、在來のiはいつも口蓋化した子音の後に來るやうになつて、而もこの場合にはいくらか口の開きが狹いやうな氣味があるが、宮古八重山の方では、ケ、ゲは ki, gi, キ、ギは kï, (ksï) gï (gzï) セは Shi, シは sï, 子は ni, ニは nï, ペは pi, ピは pï (psï)、ベは bi, ビは bï (bzï)、メは mi, ミは mï, レは ri, リは rï となつて、エ列とイ列とがかつて立派に對立してゐた時代の跟跡を留めてゐる。琉球で國劇の盛んであつた時代に、役者は正しい發音をしてゐて、「胸（むね）に思染（おみそ）めれ」の如き詞（せりふ）を Muni nyi umi sumiri と發音したとのことであるが、今でも五十四五以上の上流社會の紳士は、ni（子）と nyi（ニ）とを立派に使ひわけてゐる。私はかつて古老からかういふことを聞かされたことがある。故護得久（ごえく）前代議士の祖父朝置翁の青年時代に、麻文仁（まぶに）按司（あんじ）といふ七十歳位の老人がゐて、當時の青年がクビ（壁）とクビ（首）との發音を混合してゐるのをこぼしてゐたとのことであるが、これで見ても、今から百年ばかり前には、イよりは少し開いた、エに近い母韻の存在してゐたことがわかる。先達而沖繩縣稲

嶺校の校長の島袋（しまぶく）源七君がその著「山原の土俗」の稿本をもつて來て私に示したが、その中に琉球語の音韻研究上見逃すべからざるおもしろい材料があつた。同君が採集したオモリの中に、「しちゑ」（しての意）といふ假名遣が澤山あつたので、このちゑはどういふ風に發音するかと聞いて見たら、チに似て、チでも無い、もつと口が開いたものだ、といふのを聞いて驚いた。そしてそれでオモロの中にざらに出て來るちへ又はちゑの發音の正體がわかつたので面白いと思つた。それからoとuとの關係は、eとiとのそれのやうに、判然してゐないが、コ、ゴがku, guになつて、ク、グがchu, juになつたり、ロがruになつて、ルがyuになつたりするところなどは、少しく注意すべき點であると思ふ。いゝ耳をもつて居られた田島先生は、oから來たuと在來のuとの間には、いくらか區別があると、主張して居られたやうに覺えてゐる。兎に角現代琉球語にe oの短母韻が缺げてゐるのは事實であるが、長母韻ē ōが存在してゐることを忘れてはならぬ。その代りに沖繩本島では、二重母韻が無くなつてゐる。それはaiがēとなり、auがōとなつてゐるからだ。けれども宮古八重山の方言に、二重母韻が立派に存在してゐるのは注意すべきことである。現代琉球語で長母韻になつてゐるところがオモロで悉く二重母韻になつてゐるところから見ると、沖繩本島でも、かつて二重母韻が盛んに使はれた時代があつたと推測することが出來る。

これからオモロの假名遣をとほして、古代琉球語の音韻を瞥見して見よう。オモロは大方の人が考へるやうに、琉球最古の文獻ではない。『おもろさうし』の第一卷が出來る一時代前に琉球文で書かれた二つの金石文が建てられたことを知らなければならぬ。左にオモロ結集の前後に出來たこの種の文獻を時代順に竝べてみよう。

| | | | |
|---|---|---|---|
| たまおどんのひのもん | 弘治一四 | 文龜　元 | 西曆一五〇一 |
| またまみなとのひのもん | 嘉靖　元 | 大永　二 | 同　一五二二 |
| おもろさうし第一卷 | 同　一一 | 天文　元 | 同　一五三二 |
| *かたのはなのひのもん | 同　二二 | 同　一二 | 同　一五四五 |
| 添繼御門の南のひのもん | 同　二五 | 同　一五 | 同　一五四六 |
| *やらざもりぐすくのひのもん | 同　三二 | 同　二三 | 同　一五五四 |
| 浦添城の前のひのもん | 萬曆二五 | 慶長　二 | 同　一五九七 |
| おもろさうし第二卷 | 同　四一 | 同　一八 | 同　一六一三 |
| ようどれのひのもん | 泰昌　元 | 元和　六 | 同　一六二〇 |
| おもろさうし第三卷以下 | 天啓　三 | 同　九 | 同　一六二三 |

これらの金石文は、「琉球國中碑文記」に集められてゐるが、而も＊を附したものを除くの外は、

今なほ石碑も立つてゐるのだから、三四百年前の散文の見本として、實に得難い資料といはなければならぬ。そしてその假名遣がオモロのそれと全然同じもので、オモロが幾度か寫改めた間に誤字を生じたのに反して、これは石に刻込んだのだけに、可なり信用し得べき性質のものである。

この外琉球産業界の恩人と稱せられる儀間眞常の後裔なる首里市の田名家に、その祖先が、大永三年（明の嘉靖二年）たから丸の官舍《くわにしや》となつて、支那へいつた時に、貰つた辭令を筆頭として、近代に至るまでの琉球文で書いた辭令が遺つてゐるが、これも亦見逃すべからざる好資料である。

吾々はこの古文書とあの金石文とをオモロと比較することによつて、古琉球に於ける散文と韻文との關係をもかいまみることが出來るのである。

オモロ及びこれらの文獻は、記紀萬葉に比べると、遙に後世のもの——室町時代より德川の初期に至る頃までのもの——であるが、伊東博士等の研究によつて、この時代の琉球の寺院の建築に、飛鳥時代の樣式がほのみえてゐるやうに、これらにも亦王朝時代の色とかをりとが現はれてゐるのである。現代琉球語には、エ列とオ列とが無いのに、オモロをあらはすにエ列オ列の平假名を用ひてゐるのを變だと思ふ人があるかも知れないが、この疑問は南島語の音韻變化の激しい現象を目擊したら、容易く解けて了ふのである。前にも述べた通り、宮古八重山の方言及び國頭郡の一部の方言では、イ列とエ列との間に差別があり、琉球の標準語に於ても、百年前までは多少の區別があつたやうだから、四百年前オモロを平假名で寫した時代には、もつと判然《はつきり》した區別があつたやうに思はれる。琉球人が平假名を使用したのは、鎌倉以前に溯ることが出來るから、二國語の母韻の價値に餘り間隔の無かつた時代には、彼等は大した苦心なしに、自國語を寫出したであらう。そして彼等の子孫は、之を襲踏して今日に至つたと見ることも出來る。けれどもこれには別に文獻の徵すべきものがないから、これ以上臆測を逞うすることは出來ないが、兎に角當時イ列とエ列が全然同一のものであつたとすれば、エ列を用ひずに、イ列を使つたであらうに、兩方の使ひわけをしてゐるところから見ると、當時兩方が存在してゐたことは確である、たゞこのeがイに近かつたか、エに近かつたか、その中間に位してゐたかは、はつきりわからない。オ列とウ列についても亦同樣なことがいへよう。ところが中には、おをうと書いたり、至つて稀にうをおと書いたところもある。一例を上げて見ると、オモロに、婿《むこ》をもこと書いたり、崇元寺の下馬碑（明の嘉靖六年）に、こま（此）をくまと書いたりしたやうなもので、萬葉にこがね（黄金）をくがねと書いたり、むこ（婿）をもこと書いたりしたのと同じ現象が見られるのは面白いことである。その外によ（世）をゆ、しも（下）をしむ、よろひ（鎧）をよるいとした例もある。このエ列とオ列とは彼等が北方の同胞と袂を分つた頃から、變化し始めて、たうとうイ列とウ列とに合して、區別し難きまでに變り果てたのであらう。

オモロの假名遣を調べてゐると、いろ〳〵の疑問がおこつて來る。ワ行についていふと、wが母韻の前に附いて音節を作る場合に、今日の國語にはワ(wa)だけしか遺つてゐないのに、琉球語には、ワ(wa)、ヰ(wi)、ウ(wu)、ヱー(wē)、ヲー(wō)と全部揃つてゐる。然るにオモロでは wonari(姉妹)をあらはす場合に、十中八九までは、おなりと書いて、をなりと書いたのは一つ二つしかない。(けれども wekeri 兄弟はちやんとゑけりと書いてある。又 wōrē といふ神職の名をあらはすには、ワ行を用ひずに、あおりやへ又はあおりやゑとしてある。これは一體どういふ譯であるか。思ふにそれは當時の琉球人に五十音韻の素養がなかつた罪ばかりではなく、ヲの古音を失つて、長い間オとヲとの所屬をきめることが出來なかつた倭人が、五十音圖を南島に傳へたにもよるだらう。ヤ行についていふと、國語では、イ(yi)エ(ye)はア行のイ、エと同一のものになつてゐるのに、琉球語には、yi と ye とが存在してゐる。そしてこの yi と ye とをあらはすに、オモロではいとえと用ひないで、ゐとゑとを用ひてゐる。これ亦どういふ理由であるか。現代では、wun(居る)、wutuku 又は wikiga(男)、wīmun(雄)、winagu yinagu(女)、wutu(夫)、wūyun(折る)・wi(甥)、wujasā(叔父)、wubamā(叔母)、wiguyun(剜る)、wiyun(醉ふ)等は、何れもワ行で始まつてゐる語であるが、オモロの假名遣では、ア行とワ行とが混同してゐる。中には、「さけや、ゑよてど、たちよる」(酒には醉ふてぞ歸る)といふ風に、正しい使い方をしたのもある。それからゐより(居たり)と書いたのもあるが、このゐを wi と發音したかは疑問である。現代語では、yi になつてゐるから、オモロ時代にも多分さうなつてゐたかも知れないのである。ゑ、ゐは we, wi と發音する場合と、ye, yi と發音する場合と、二通りあることを知らなければならぬ。吾々琉球人が普通語をあやつる場合には、e、i は ye, yi としたがるが、かういふ傾向は、おもろ人の場合にもあつたと見なければならぬ。して見ると、ア行のエや、ヤ行のエは、もつてゐながら、オモロにえを用ひないで、ゑを用ひた理由もよくわかる。それからオモロには、わちへ、ちよわちへ、いぢへ、など、ちへがざらに出て來るが、このへは國語の弖爾波のへ、まへ(前)、候へなどのへが、エと發音するところを見て、エの代用をさせたもので、これがちにくつつくと、che と發音したのである。今なら單にちと書くべきところである。オモロには、促音をあらはす時には、たちちへ(立つて)、うちちへ(打つて)、てうらちゑ(手を打つて)など、子音を二つ重ねるやうになつてゐる。

P音のことは、拙著『古琉球』に書いて置いたから、こゝでは述べないことにするが、弖爾波の ba が wa に變ることについて少々述べておこう。オモロには、うたは(打たば)、やれは(なれば)、みおやせは(奉れば)、なよれは(踊れば)、おい人にとゑは(五の五七)などのやうに、濁音でないはが使つてあるので、校訂の時私は古格に從つて、最初ばにしたが、中におい人にとゑわ(十二

の十五）のやうに、わざあるのを見て、念の爲に中卷以下の校正の場合には、悉く濁音の記號を取つて了つた。方言を調べて見ると、ba（バ）になつてゐるところと wa（ワ）になつてゐるところとがあるが、標準語では、wudurē（踊れば）、wudurā（踊らば）といふ風にwが落ちてそのaが將然形若しく已然形の語尾の母韻にくつついて、動詞に融合して了つてゐる。慶應三年に、最後の國劇が演ぜられた時。脚本の中に出て來るこの弖爾波をバと發音すべきか、ワと發音すべきかについて、其道の人々の間に議論が鬪はされたといふが、此時男の言遣ひは重いから、バと發音し、女のそれは輕いから、ワをと發音したらいゝ、といつたやうな議論も出たとのことである。兎に角校訂おもろさうしでは、原本に從つて、大部分ははにして了つたが、それはオモロの中にも方言の差があつたゞらうから、これを、はつきりきめるのはどうかと思ふ。てだ（太陽）は南島語中どの方言でも tida で、昔も確にさうであつたと思ふが、オモロにはてたと書いたのもある。これは何れもてだと濁音にして置いた。オモロにはかういふやうにわかりきつたものに、濁音の記號がつけてないのもあるが、さうでは無くはつきりわからないで、つけて置かないのもある。濁音のあるなしによつて意味が違ふ場合もあるから厄介である。

最後のおもろ主取の存命中、オモロの發音についてきいたことがあつたが、彼はあまみきよ、しねりきよを Amamikyu, Shinirikyu といふ風に、母韻は今日の發音により、子音は古代の發音によつて、となへてゐた。そしてそれが祖先よりの言傳へだといつてゐた。袋中上人の「琉球神道記」に、あまみきよ、しねりきよの神名が、梵字で書かれて、その上片假名がふつてあるが、やはりシチリキユ、アマミキユと發音してゐる。それから同書に、海神君眞物（キンマモン）出現の時の御唄（オモリ）といふのが出てゐるが、「竺土ノ唄ノ如シ。其詞多ト雖今少分ヲ擧」といつて、やはり梵字でぶつつけに書いて、片假名までつけてゐる。左に之をオモロの記載方によつて、配列して見よう。

きけいきみかなし
ねいしまいしあらぎやめ
きゆわれ
きけいおほきみぎや
をれいにゆりゑをわれば
まんまんおすらまん
けゆわれ

著者は三年間も滯在してゐたといふけれども、もとより外來者であるから、その寫音方に十分な信用は置けないが、それでもこれで當時カ行をその文字通りに發音したことが窺はれないことはない。ところがこれから二十年後に出來たオモロの十三の卷の一三一の標題に、『きこゑ大ちみ

がせおさよむせいくさがふし」といふのがあつて、大きみが大ちみになつてゐるところから見ると、此頃既にカ行の口蓋化が行はれてゐたことが推測される。袋中が神道記五卷を書いたのは、その「琉球往來」によると、慶長八年であるから、この頃にはたゞオモロの第一卷があつたのみで、二卷以下はまだ出來なかつたが、彼の言によれば、彼はかなりのオモロを覺えてゐたやうである。オモロ双紙中には、この御唄（オモリ）そのまゝのは見出せないが、初の三行は六の卷の二四と二十二の卷の四四に出て居り、以下は一の卷の一四と三の卷の四五とに稍〻似たのが出て居る。この頃までオモロの異本が澤山あつたことは、かういふところからでも證明することが出來よう。

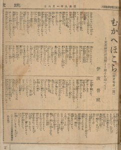
終りに、私は支那人の琉球語研究のことを述べて、この稿を終らう。新村博士は、かつて「藝文」誌上に、「南島を思ひて」といふ一篇を掲げられて、拙著「古琉球」を紹介されたことがあるが、その結末のところで、琉球語の音韻變化を研究するには、明朝から清朝にかけての支那人の琉球に關する研究を一瞥する必要があるとの注意を與へられたことがある。其後東條操氏は「南島方言資料」を編纂され、その附錄として、中山傳信錄音韻字海華夷譯語琉語對照と音韻字海篇類編海篇正宗琉語校異とを出されたが、私は之を播いて、オモロの音韻に關する幾多の疑義を闡明することが出來たやうな氣がする。之を述べる前に、重なる三書の時代を明にして置く必要がある。中山傳信錄は、康熙五十八、九年（西暦一七一九―二〇）冊封副使徐葆光の著であるが、その中に收めた琉球語は著書が自分で採集したものではないらしい。華夷譯語は、萬曆の進士朱子蕃、茅伯符兩人の手になつたもので、安南河内の東洋學院のオールッソー氏によれば、萬曆八年（西暦一五八〇）頃のものであるといふことである。それから音韻字海は、明の周鍾等の編で、新村博士は萬曆初年を下るまいといはれたとのことである。新村博士もいはれた通り、寫音した蒐集者が閩人であるか北人であるかに由つて、その琉語の讀方も大に異るわけであるが、どちらにしても、寫音して以來、支那音自身も變化してゐるだらうから、その變遷の經路を熟知した上でなければそれを利用して、琉球の音價を定めるのも艱難な業でなければならぬ。先づ華夷譯語に、帶を乞角必としたものから調べて見よう。乞角必はkiikibiで、國頭郡の方言では、今なほさういつてゐるところがある、所によつて、kikkibiといふ所もあれば、ichiibiといふ所もある。オモロには、十の二四あがる三日月がふしに、「ゑ、け、あがる、のちくもは、ゑ、け、かみが、まなきゝおび」と出てゐる。その他「たれきゝおび」（十三の一八二）といふことも見えてゐる。三四百年前には、琉球の標準語でも、帶をさういつたことがわかる。同譯語に、賞賜又は給賞を非近的としてあるが、これはfikidiと、讀むだらう。オモロの十五の五四に、「おれど、ひきいぢへ、物」とあるが、それは引出物（ひきでもの）の義である。現代の琉球語では、fichijimunといつてゐる。ついでにいふが、支那音には濁音がない爲に、外國語のそれをあらはす場合には、清音の前に鼻音nで終る音をもつ

て來て、後に來る音を濁る約束を設けてゐるらしい。これは同譯語に、硯を孫思立、鞋 saba を三扒、金 kugani を孔加尼、水 mizi を民足、右 migiri を民及立、謝思 miibukuri を密溫普姑立といふ風にあらはしてゐるので能くわかる。他の二づも同じやうなあらはし方をしてゐる。譯語に、鮮魚を必撒莫只としてあるが、これはとりもなほさず nshamuchi で、「混效驗集」には、「むしやもち、魚類をいふさかななど云が如し」とある。尚家あたりでは今なほさういつてゐると聞いてゐる。天を傳信錄に、町 tin としてあるが、他の二つには、甸尼 tini としてある。オモロでは十中八九までは、てにと書いてある。前に述べた嘉靖三年の儀間文書にも、官舍をくわにしやと書いてある。金武村のオモリにも、「てにが上（うへ）にのぼて云々」といふのがある。方言で今なほさういつてゐる所がかなりある。それから譯語には、錢を熱尼(勢尼の誤か)zini としてあるが、それが今の方言にものこつてゐる。これで見ると、古琉球人には、n(ン)を發音することが困難で、i を附して ni(ニ)と發音したことがうかゞはれる。現今大根を dekuni といふのは、古琉球の面影を見せた發音法である　竹をあらはすに、傳信錄では、托凡、音韻字海では達急、譯語では達及とし、譯語で刀をあらはすに達只 tachi 言語をあらはすに姑只 kuchi としたところを見ると、支那人は琉球語のけ又はきをあらはすに、凡、急、及等を用ひ、ちをあらはすに、只を用ひたことがわかる。譯語に、多少を亦加撒 ikasa としたのは、面白い例である。今日標準語では、如何を chā、如何程を chassa といひ、脚本では、如何（いきや）が、如何（い）しと書いて、icha ga, ichashi と讀ませてゐるが、オモロには、「かづれんは、いきやる、かつれんが云々」(十六の二一)と出てゐる。このいきやるを韻文を朗讀する場合にのみ ikyaru と讀ませたばかりでなく、明末までは口語の場合でも、同樣に發音したことが明白になつて來る。宮古八重山及び久米島糸滿を中心とした地方を除くの外の沖繩の方言には、ワ行のワ(wa)、ヰ(wi)、ヱ(we)を咳をする時に出る音の稍ゝ輕いものを前にくつ附けて發音するのがある。チャンバレン氏はこの子音をあらはすに ww を以てしたが、これは萬國音標文字（インターナショナルホネチックサイン）の ʔ を用ひて、ʔw とした方が適當である。否印刷の便宜上、Jespersen に從つて、'w とした方がいゝかも知れぬ。(この外に、'y 及び 'n, 'm, 'ŋ もあるが、こゝでは必要がないから省くことにする)。二三の例をあげて見ると、'wenchu(鼠)、'wi(上)、'wā(豚)等の如きものである。今日の發音方によると、オモロのみおやせ、おやぐに、のおやは 'we と發音し、おい人、もまちどりおゐたて、あかのおゐつきのおゐは 'wi と發音すべきものであるが、おもろ人（びと）が果してさう發音してゐたかは疑問である。上を傳信錄に威としたのを見ると、二百年前には 'w があつたやうに思はれるが、音韻字海と華夷譯語とに、吾乜、烏乜(ui)としたのを見ると、オモロ時代には、この 'w はまだ發達してゐなかつたやうに思はれる。多分 ui が 'wi に變つたのも ai や au が ē や ō に變つたのと同時代であつたらう。以上述べたところを總合して考へて

几　几

[illegible]
地道

音



號　昭和九年一月六日　（第三種郵便物認可）

# むかへほこら（新オモロ一篇）

## —東恩納君が南蠻より歸るを迎へて—

伊波普猷

おぎやかもいぎや御代は
だにすとよみ聞かれれ。
大名唱舞だる
西の海の波濤の彌見
フェニキヤ人の樣に、
親御船はくり浮けて、
陸地ぢむやにはらちへ、
やまと旅は勿論
唐南蠻瓜哇迄
糸かけて攜しよわちへ、
向ふかた和て、
迎へ饗られて、
海山の寶あだてやり、
白銀黄金積み滿ちへて、
眞南風に徐々押されやり、
瀬易く黄金口戻りわちへ、
三十六島長久
甘世す讃謝だれ。
あけよう百年も待たな、
玉抱ちへ科かゝて—
日が末按司おそひの
かけぶさる御代に、
闘慶の節武士に落されて、
やしろの御士にたらされて、
濱の島ばひ取られ、

東かないかけられ、
長良川の鶴のやに
支那貿易の利益迄
滑く吐かされて、
おにきやらはおきなは
苦世す瀨ちやれ。
列地のお仕置に
具志頭の大計らひに
誇り世榮たすも瀬の間、
やかれ黑船の
島つれ國つれのやに
しげく押寄せて：
心がうちは迷はちへ、
肝が内はまよはちへ、
淺ましやまきよく
雨はふらんすが、
上下まぢよに
み袖ばな濡らちへ、
あとのうんちよめに
やまと代す來ちやれ。
官に畏多さ
御天子の御恩、
みかない貢御で、
世振りうち變やり、
天ぎや下きらのかず

世果報す讃たれ。
誠にやぐめさ
支那との戰に
露西亞とのくはらに
皇國す稜威まさたれ、
みかない重みゆか重で、
おかけぶさへ御代に
いき果のおきなは
孤島苦ちへ、
民百姓の生活苦れしや
肝痛さ誰知らぬ。
島守かたくづら
島のあすた迄
心そろて語らても、
肝そろて饗ちへも、
お助けはあらな、
世直しの神の
あけはい、島の根
にらい底沈みゆり、
おま人の嘆き
おぼつ迄鳴り響で。
あけ〳〵、だにならぬ
孤島苦のさ中に、
物知りの噂りの喧しや、
御間切の爭ひの物々しや。

如何る偉人出ちへてが
だ島は救ゆら。
あれ見るろ、おま人。
からは經濟まちへ、
黄金口戻たる
東恩納の大親。
迎へ饗れ、ま人べ。
昔けさしの
大父祖のやからの、
せぢあらとみおし浮けて、
定廻りよわちやる
眞南蠻の浦のかず
み足跡　尋ね、
功業あだてやり、
今ど黄金口取たる。
これど　これ
おま人目響す士齊。
あぢへけり大父祖ぎや
工だる事の偉太さ
微〳〵細くす語りゆれ。
誰知らぬ物語
聽きゆすがまさり、
きかぬすがほろび。
耳の根ほらちへ、
聽き留めれ、おま人。
大父祖　あやかて、
肝まげく寶に持ちやり、
各自の道あけて、
心一つなやり、
世直しいくませ、ま人べ。

（十二月廿七日東恩納君歸京の日稿）

百六行

## 校正を終へて

見ると、おぼろげながら、オモロの發音がわかるやうな氣がする。

なほオモロの内容についても言ひたいことがあるが、餘り長くなつたから、これ位のところで切上げようと思ふ。たゞオモロを解釋するにあたつて、あの疑問の句讀には拘泥せずに、又あの言葉間書にも囚はれずに、根柢から研究し直すのが寧ろ捷徑である、といふことを附加へて置きたい。

---

擱筆するにあたつて、本書の出版に補助を與へられた帝國學士院に敬意を表すると同時に、本書の刊行に盡力せられその上種々の注意を與へられた柳田國男先生と二十年前私にオモロの研究を慫慂された恩師田島利三郎先生とに感謝の意を表し、本書の印刷に際して、いろ〳〵と面倒を見て下さつた岡村千秋君及び進んで校正の任に當られた比嘉春朝君に御禮を申上げます。

大正十四年八月二十五日、小石川の寓居にて

校訂者

る　六行

No. 1

むかへほこら（新おもろ一篇）　十三ノ三一

―東恩納君が南蛮より帰るを迎へて―

伊波普猷

おぎやかもいぎや御代（みよ）は

だにすとよみ聞（き）かれれ。　十七ノ三、五ノ五一

おほむかし音だる　おとだる　八ノ二一

~~仏~~　西（にし）の海（うみ）の波濤（なみ）の健児（くわ）　十二ノ一〇二

フエニ妹ヤ人（びと）の様（や）に、

浮（うき）寶（たから）くり浮けて、　十三ノ二〇

~~陸地~~（地道（ぢみち））歩むやには~~ゆ~~りやちへ、

ぢみち　あまみや　十ノ三八

八ノ二一　十二ノ一〇二　十三ノ一〇七　十七ノ三

20×10　國語科學講座原稿用紙

| 巻 | 章 | 頁 | 行 | 誤 | 正 |
|---|---|---|---|---|---|
| 八 | 五八 | 二九 | 九 | もとうら | もゝうら |
| 八 | 五八 | 二九 | 一〇 | 世そら | 世そう |
| 八 | 五九 | 三〇 | 三 | おゑつきや | おゑつきぎや |
| 八 | 六〇 | 三〇 | 九 | おゑつきや | おゑつきぎや |
| 九 | 三二 | 二〇 | 八 | しもとよみ、いくさ、しもの | しものとよみ、いくさ |
| 九 | 三二 | 二〇 | 九 | き（アき）うやれ、いくさ | しもの、き（アき）うやれ、いくさ |
| 十 | 五 | 六 | 二 | げらい（アら）こぎ | けゑい（アら）こぎ |
| 十 | 八 | 九 | 九 | そうち | そうち |
| 十一 | 一八 | 一四 | 一一 | きこゑあぢおそい | きこゑあぢおそいが |
| 十一 | 一八 | 一四 | 一二 | とよむあぢおそい | とよむあぢおそいが |
| 十一 | 七四 | 五二 | 七 | くゑなおちへ | くゑ、なおちへ |
| 十一 | 八三 | 五九 | 六 | きこへあんじおそい | きこへあんじおそいが |
| 十二 | 八七 | 六六 | 一七 | コ・ーレ | コ　レ |
| 十三 | 一一 | 五 | 一三 | とよめ（アめ）み | とよ　（アめ）み |
| 十三 | 二八 | 六九 | 一〇 | てよりとみ | ておりとみ |
| 十三 | 二三 | 七七 | 一一 | あんぢ | あ　ぢ |
| 十五 | 四五 | 二一 | 五 | さたちこ | さそちこ |
| 十六 | 三一 | 一六 | 一 | だ　が | た　が |
| 十八 | 一 | 一 | 一 | さんことよだし | さんことよたし |
| 十八 | 九 | 五 | 三 | うちでゑ | うらでゑ |
| 十八 | 三〇 | 一五 | 一四 | ちゑん | ちゑれん |
| 十九 | 二九 | 一四 | 五 | かつれ | かつれん |
| 廿一 | 二二 | 一六 | 八 | あやぎやれ | あやきやれ、 |
| 廿一 | 四一 | 二九 | 一一 | おぼろ | おぼつ |
| 廿一 | 四六 | 三二 | 一二 | お・ぼろ | おぼつ |

| 跋 | | | |
|---|---|---|---|
| 頁 | 行 | 誤 | 正 |
| 五 | 八 | 疑門 | 疑問 |
| 一〇 | 一三 | 書記 | 書紀 |
| 一二 | 一五 | 「もゝとふみあがり」 | 「もゝとふみあがり」 |
| 一四 | 八 | こゝそゝにに | こゝそゝに |
| 一九 | 一四 | 混合 | 混同 |
| 二一 | 八 | 一五四五 | 一五四三 |
| 二三 | 四 | 襲踏 | 踏襲 |
| 二六 | 四 | 若しく | 若くしは |
| 二六 | 七 | ヲなと | ヲと |
| 三一 | 一三 | 烏セ(ui) | 烏セ(ue) |

第四の（一八）ノ鼇頭ニ　四の一　ヲ記入スベシ
第五の（五七）〃　十二の一五　〃
同　（五九）〃　十二の一六　〃
第六の（一）〃　四の五四、廿の四四、廿二の一五　〃
同　（二）〃　四の五五、廿の四五　〃
同　（三）〃　三の二、四の五六、廿の四六　〃
同　（四）〃　四の五七、廿の四七　〃
同　（五）〃　四の五八、十二の九三、廿の四八　〃
同　（六）〃　四の五九、十二の八八、廿の四九　〃
同　（七）〃　十二の五四、廿の五〇　〃

No.　　　早稻田大學新聞原稿用紙

大和旅は　だによ

唐南蛮（なばん）かはらぎやめ　七一二、

~~[illegible]~~とかけ掛けて　はしよりちへ、　十三－一九〇、三－六

向ふかさ和（しち）て

迎へはこられて、

海山の寶あだてやり、

真南風（まええ）　さらめけば、　十三－三五

親の船　揚げなほちへ

~~無蔵の林け為が[illegible]~~

なもちや黄金　[illegible]　よらちへ、　十三－九〇

~~中もちちへ　積み満ちて~~

ひ

---

まそえ風　冷さきしれば　十三－二〇五

風まや帆　饒こしなひ

汐のまや　船揚にしなけ　十三－五九

南の島の干瀬[illegible]

きよらく　折り[illegible]

あれる　ふつれる

干島に　折り出けて

にらいと[illegible]

もおけちへ

海[illegible]　おもろの[illegible]　十三－一一〇

あやのや帆　やそら

にらいと　折り出けて

まにまに[illegible]

あまみ

にらいとはけり遠さて

[illegible]出は出けて

まさし　まわちへ

No.　　早稲田大學新聞原稿用紙

やゝのしご帆

そよらくはりやちへ　十三／五〇

十ノ一六

十三／二九

いちのかぜまぜてよく

海なはすやしのやほら　〆手ちよく

船にあげて待てば　十三／一一〇

やれけ、やゝのやほら　十ノ七二

出帆のまゝ

やほら引ちへ持てば　廿一／五八

親

急ゝやれけ

親ぬ旋潮け来ほを

---

をちり沖たかべて　（はやちへ）

船やれひやしはやしやーい、（五／五〇）みおやし　十ノ五七

~~[illegible]~~ やはまち　十三／九三

~~[illegible]~~

やほら引ちへ待てば　廿一／五八　十三／八七

風のまや帆袋にしない　十／一〇五

波のまや船腹にしない、　十三／九三

急ゝやれ、しぐ、　十ノ三三

綾雲に送られて。　十三／一一二

~~[illegible]~~

~~[illegible]~~

十五／三

二十ノ五〇

にらひどの黒潮
やとらおし襲ひて
ふたまたもはり透ぎ
百島もはり透ぎ　十五／一三七
千瀬のかず折り曲げて
黄金はぬきあてやり、　十三／一二〇
なだやすく那覇~~泊~~どまりはり着ちへ。
一行アキ
げにつ「船やれど　みかまへ」
三十六島（みそむしま）すがへ
あませすとよだれ」

---

[illegible]
ふたまたも透迎き
百島は[illegible]はり透き
千瀬のかず折りまげて
海原はみやくのまほくおしあけて　十三／一一〇

ゑけよう百年も待たな

玉（たま）抱（だ）ちへ科（とが）かゝり」—

日（てだ）が末（すへ）按司（あんじ）おそひの

かけぶせる御代（みよ）に、

四ノ五八

かけみせる
さきみせる

薩摩（やまと）の前武士（まへぶし）に落（おと）されて、

やしろの撫士（なでころ）に盪（たら）されて、

道（みち）の島（しま）ばひ取（と）られ、

東（つか）かないかけられ、

長良川（ながらかは）の鵜（あたく）のやに、

まへぶー
十七ノ七〇

十四ノ五六

No. 4

支那貿易（たうあきなひ）の利益（てかし）迄（さやて）

清（きよら）く吐（は）かされて、

おにきやらは　おちくなは

苦世（にがよ）す續（づ）ちやれ。

羽地（はねぢ）のお仕置（しおき）に

具志頭（ぐしかみ）の大計（おほはか）らひに・

直り世（なほよ）歡（ほこ）たすも潮（うしゆ）の間（ま）、

やかれ黒船（くろふね）の

島（しま）つれ國（くに）つれのやに

しげく押寄（おしよ）せて、

No. 5

心（あよ）が中（うち）は迷（まよ）はちへ、

肝（ちむ）が内（うち）は まよはちへ、

浅（あさ）ましや まさよく

雨（あ）~~晴や~~ ふらんすが、

上下（かみしも）共（まぢよ）に

み袖（そで）ばな濡（ぬ）らちへ、

あとの おづ あに

やまと代（よ）す來（ら）ちやれ。

実（げ）に かしきよさ

聖天子の 叡慮（おさうぜ）、

（十八ノ二五

十四ノ六

十四ノ一八

（三十ノ七

三ノ一二

No. 6

みかない貢（つぎ）軽（かる）で、

世（よ）振（ぶ）り、うち變（かは）やり、

天（てに）ぢや下（した）きらのかず

世（よ）果報（かほう）す歡（ほこ）たれ。

誠（だ）にやぐめさ、

支那（たう）との戦（いくさ）に

露西亜（おろしや）とのくはらに

皇國（みくに）す稜威（せぢ）まさ、たれ、

みかない重（かさ）みゆか重（かさ）で、

おかげぶさへ聖代（みよ）に、

[illegible]

20×10　七二／二八三八　國語科學講座原稿用紙　二十九八　一一三八

No. 7

いろ果（はて）のおろなは
孤島（しまちゃび）苦続（つ）ちへ、
民（たみ）百姓（まちゃや）の~~生活~~苦（く）れしや
肝（きも）痛（ちゃ）さ弄（さに）知（し）らぬ。
島守（しまもり）かたくづら
お島（しま）のあすた迄（ぎやめ）、
心（あよ）そろて語（かた）らても、
肝そろて働（はたら）ちへも、
世直（よなほ）しの神（かみ）の
お助（たす）けはあらな、

20×10　國語科學講座原稿用紙

一三七

2

No. 8

ゑけはい、島（しま）の根（ね）

にらい底（ぞこ）沈（しづ）みり、

おま人の嘆き、

おぼつ迄（ぎやめ）で鳴響（とよ）で。　六ノ一〇

つれなさ、だにならぬ

孤島（しまちやび）苦のさ中（なか）に、

物知りの囀（さへづ）りの喧（かま）しや、

御間切（おまぎれ）の争（あらが）ひの物々しや。　九ノ三〇

いきやる偉人（ますらやい）出ぢへてが

此

だ島（しま）は救（すく）ゆら。

20×10　九ノ三〇　十四ノ一〇　國語科學講座原稿用紙　一ノ六　十ノ八　なげくさ